

茶会記の姿 ―藪内流 藪内剣仲二百回忌―

矢野 環・耕三寺 華蓮

京の茶家として三千家と並ぶ藪内家の茶の湯については、資料が少ないこともあり、三千家に比較して知られていることが少ない。ここでは、初紹介となる流祖藪内剣仲二百回忌の茶会を含む、文政期の三茶会を紹介する。名物として知られている道具が、どのように使われていたかが実際に知れる。可能な限り、道具の図を添えた。尚、第二著者は藪内流門弟であり、茶会に見る本願寺廿世広如上人光沢の末裔にあたる。

一 藪内家 ―古儀茶道藪内流―

京都には茶家として、表・裏・武者小路の三千家、本願寺と密接な関係を保つ藪内家、裏千家一燈宗室の門に学んだ速水宗達を祖とする、御所風かつ岡山池田家や郡山柳沢家との関係が深い速水家がある。

そして、上京に位置する三千家を「上流」と称するのに対して、下京・西洞院正面に位置する藪内家は「下流」と呼ばれた。古儀茶道として紹鴎の流れを保つのみならず、明治には他流派に先駆けてラジオ放送を行い、また北野天満宮献茶を始めた。

藪内流祖は藪中斎藪内剣仲紹智（一五三六―一六二七）であり、紹鴎の弟子として「紹」の一字を受けた。利休との交流により道具や手紙

が伝わる。さらに古田織部の妹を娶り、織部縁の道具も多く伝わっている。二代月心軒真翁（一五七七―一六五五）の代に本願寺の茶道師家として迎えられ、十三世良如上人より領地の一部を拝領し現在地に移った。六代比老斎竹陰（一七二七―一八〇〇）は寛政元年（一七八九）に利休二百回忌を営んだ。また十八代文如上人（寛政元年継職）は比老斎寿像に讃を揮毫し、以後歴代像は門主から讃をいただくこととなった。寛政十一年（一七九九）本如上人が継職した。藪内家も寛政十二年の比老斎没後、七代桂隠斎竹翁（一七七四―一八四六）となる。本如上人の手作り茶碗「案山子」「黒尉」などを後の代に拝領している。また織部二百回忌（一八一四）、剣仲二百回忌（一八二六）、利休二百五十回忌（一八三九）を営んだ。本願寺では文政九年（一八二六）に廿世広如

上人（補注1）となっている。今回の茶会記は竹翁の家元後半期に属する。因みに、今年（二〇一七）は奇しくも松平不昧二百回忌にあたる。不昧の没したのもまたこの代である。次の八代真々斎竹倚（一七九二―一八六九）の時、禁門の変（元治元年、一八六四）で家屋が焼失する。燕菴は申し合わせに基づき、弟子筋にある最古の写しが移築された。その後歴代は続き、平成廿八年（二〇一六）六月七日に、十四代允猶斎竹卿が家元を継承した。

二 藪内家での茶会記録

藪内流の茶会でこれまで紹介されているものは、重要な年忌などであり、全量は大変少ない。元治の罹災時に失われた記録も多かったと思われる。流祖の剣仲忌も管見する限り、今回紹介するものが初めてである。会記の記載されている例として、石州来臨記、寂如上人御成茶事、利休二百回忌、二百五十回忌がある。

年	主	客	出典
一六五八 明暦四年二月二日	剣翁	片桐石州・藤林	〔源流〕 116
一七〇四 元禄十七年四月十九日	剣溪	寂如・下間他	〔藪茶〕 67
一七八九 寛政元年十一月廿四日	竹陰	山下他	〔利事〕 680、〔風47〕
一八三九 天保十年	利休二百五十回忌	竹翁	〔茶せ〕、〔利事〕 692

この他、茶会内容は引用されていないが、慶安元年（一六四八）十一月六日 良如・寂如（御兒子様）を迎えた会（風48）なども知られている。

さらに、地方に宗匠（若宗匠の場合も多い）が出向いた際に、歓迎や稽古の一環として行われた会や、宗匠自身が亭主として行った茶会が幾つか紹介されている。

利休二百回忌の会記は二通り紹介されている。先行する『利休大事典』は原本が明記されていない。『竹風47』は、個人蔵の原本であり、日時客組が前者と同一である。共通する部分について比較すると、表記はともかく内容は良く一致する（補注2）。二百五十回忌は、『利休大事典』が「茶道せ、らぎ」を引用転写している（補注3）。

三 対象とする三茶会

今回翻刻する茶会記は、二十件程の流派混合で未整理な茶会記の纏まりから三部を選択した。その全貌は改めて紹介の機会を設けるが、表千家系統（不審庵、長生庵、鴻池善右衛門、道正庵など）と、藪内流関連の伝授席を含む六件、さらに単発的なものからなる。その内四件が外包を持ち、表に次の通り書付がある。年紀を付す。

- （一） 燕菴會記 （文政九年三月二十二日午時 藪中斎式百回追福）
- （二） 九條右府様燕菴御来會附 （文政八年十二月十一日正午 燕庵）
- （三） 茶會 道具附／會席附 （十月十四日正午 燕庵茶會）
- （四） 文政十年亥夏 田安殿御茶會附 （香炉香合水指茶碗が楽）

この内（三）は紅葉葉刷模様の紙に記される。紙質が異なるが同じく紅葉葉刷模様紙が二件あり、一件は（三）とほぼ同内容の異本である。

もう一件は、『喫茶南坊録』からの道具抜き書きとなっている。さらに包紙なし模様なしで燕菴関連が二件あり、一つは文政十一年六月十八日に三名に伝授を行った時のものである（いずれ紹介する予定である）。

ここでは燕菴に関わる（一〜三）の三件を翻刻紹介する。主な道具名を付す。参考のため、前節に掲げた四会の道具と比較する。

茶会1（一）	掛物	釜	香合	花生	茶入
	大燈国師四行	引拙大霰猿釜	キンマ	姫瓜	圓壺
後座掛物 劍仲号偈					
茶会2（二）	阿仏房長歌	引拙大霰猿釜	青貝	なた作	柳藤四郎
	茶会3（三）	相阿弥「安心」	芦屋 銘獅子頭	織部	鳴立沢 黒唐津
石州来臨記	利休の文	富士	青地瓢箪	嶋物象耳	丸壺
寂如上人御成	国師	大霰	存星	船	大瀬戸肩衝
二百回忌	大燈国師一行	丸与二郎	信楽烏帽子	象耳	八重桜
後座掛物 利休生害前細川幽斎翁へ御暇乞之文					
二百五十回忌	大燈国師四行	古天明金槌釜	キンマ	姫瓜	八重桜
後座掛物 居士末期の文（二百回忌と同一物）					

道具はいずれも錚々たる来歴のものである。詳細は註記にゆずり、簡単に述べる。大霰猿釜は環付が猿であり、元は引拙（天王寺屋宗伯）所持、後に大和納言秀長から古田織部に渡った釜と見なされる。キンマ宝珠香合は紹鴎伝来。姫瓜は燕菴名物の一つ。秀吉が尼崎在住の頃の劍仲の屋敷に訪れたときに、姫瓜を生けたことから名付けたとされる。圓壺も燕菴名物。「天下一」と称す。阿仏房長歌と先の大霰猿釜は、藪内家伝

来の俊成懷紙を烏丸光廣に譲ったときに、代わりに遣わされた。「なた作」は劍仲作。織部香合は、古田織部が贈った。二百回忌での大燈国師一行は「生鉄崑崙雲外走」。後座ではいわゆる 利休「末後の文」を掛けた。象耳とだけあるが、姫瓜であろう。古瀬戸八重桜肩衝は燕菴名物。ここで、相阿弥の二大字「安心」については、本願寺と関係して特定の意味があるように思われる。相阿弥は時衆として、つまり浄土教の立場での「安心」を書いた。浄土真宗としては、十七世法如のころから、安心（救いの境地）をめぐる教義対立があり、本如の頃にはこの「三業惑乱」が寺社奉行の介入で漸く収束し、文化三年（一八〇六）十一月に本如が「御裁断御書」を発行して決着を見た。このことを踏まえての掛物であろうと推される。相阿弥関連の掛物としては、茶入図を含む君台観左右帳記の断簡らしきものが、表千家の伝授席で掛けられた例はある。それ以外の例を見ない。

茶会1の「藪中斎式百回追福」とはつまり藪内劍仲二百回忌である。これを利休二百五十回忌と比較すれば、掛物は大燈国師尺牘四行物が同じ、掛替は劍仲号偈と利休末期の文、釜は天命の引拙猿釜と利休金槌釜、香合は紹鴎伝来キンマ、花入は東山殿御物姫瓜、茶入はいずれも燕菴名物の 天下一円壺と八重桜肩衝となっており、似た構成を基本として変化を付けている。当然ながら、利休忌には利休ゆかりの道具が使われる。

四 翻刻部

三件の茶会の翻刻を行う。できるだけ原文に従った配置で行う。文字

の大きさは2段階に留める。

旧字体の書写体で書かれている場合、Shift-JISの範囲で旧字体が使えるならば、用いている。

道具の説明の註番号は、行の下部に記載する。

香合 キンマ寶珠

四
(219)

竹翁好

炭斗 新細籠

ほう烙 宗品

懸物 劍仲號偈

註7

茶会1

円鑑国師筆

(包紙) 燕菴會記

註1

東山殿御物

花生 姫瓜

註8

(表)
文政九年三月二十二日午時

利休文添

藪中斎式百回追福

註2

花蕪な花

燕菴會席

水指 飛驒曲もの

懸物 大燈国師

註3

茶入 唐物圓壺

註9

古溪和尚文添

名物松之木盆に載

風菴漢東

引拙所持

註4

万代やかんとう

釜 古天猫大霰

註5

袋 吉野かんとう

登り猿銃付

細川どんす

挽屋箱書付

風爐 宗四郎棗形

細川幽斎翁

茶碗 伊賀

茶杓 利休作桑

銘孫の手

筒剣仲

建水

竹輪

薄茶器 時代蒔繪棗

同茶碗 瀬戸

茶請

三杯酢

卷煎 ゆみそ

向 おろめ 汁 わりふき

蓮根 粒椎茸

飯

煮物 大徳寺麩

根芋

坪 四方揚げ豆腐

胡麻みそ添

註 10

註 11

□汁

蓴菜

松露

はり生姜

取肴

百合根

甘栗

黒□り

菓子

白外良

搗栗

茶銘 後昔 上林三入詰

茶会2

(包紙)

九條右府様燕庵御来會附

(表)

文政八年十二月十一日正午

御成

九條右府様 御相伴

新御門主様 東儀薩摩守

燕菴

初座

掛物 阿佛房長歌

烏丸光廣卿奥書

釜 引拙大霰

登り猿環付

右式品ハ俊成卿懷紙を差上候

代りとして被下候なり

香合 唐物青貝

松之模様

炭斗 桐木地

炮烙 玄斎

後座

花生 剣仲作一重

銘なた作とあり

花 黄梅

侘介

水指 伊賀三つ足

茶入 柳籐四郎

袋式つ 望月漢東

藤嶋緞子

御天目 當御門主様

御手造黒

御銘雪の下枝

御臺唐物

御相伴茶碗 古唐津

菊桐御紋付

太閤様方剣仲拝領

(裏)

茶杓 利休共筒

さび竹

曲建水

竹輪

薄器 竹心好

栗蒔絵棗

御茶請

三杯酢

越後味噌

御向 生鱈作り身

御汁 根いも

水前寺のり

落し

くわん草

からし

御飯

御煮物 巻あま鯛

なめ茸

御焼物 海老かまほこ

御香之物 奈良手煮茄子

守口大こん

御吸物 寒松露

針生か

御取肴 糍手真 あゆ

さゝい

豆腐かん

同 小鳥たゝき

竹の子

御湯 香煎

御菓子 小倉餡饅頭

水栗

御干菓子 薄氷

松葉

御茶 初昔 上林三入詰

以上

茶会3 (包紙無しを底本とする) 包紙付の記載を下部に記す

(包紙)

茶會 道具附

會席附

(本紙)

十月十四日正午 燕庵茶會

萩原新二位殿

相伴 蜷川恒存

イに 客名ナシ

註22

横田□分

懸物

相阿弥横物

安心二天字名判在

釜

芦屋 劍仲所持

銘獅子頭

香合 銘にはあて 織部 古織方到来と イ 織部焼 尤古織 註24

たもと、云伝 籬に梅絵 蓋裏に有 入来之砌袂に手持

比老斎 贈被申候に付銘には

表に劍仲書付在 あらてたもと申侍よし

炭斗 古瓢 劍仲所持 イ 古瓢 劍仲所持

かしこしな人の絶ぬを楽しみて かしこしな人の絶ぬを楽しみて

ひちを枕と身をはふるまで ひちを枕に身をおふるまで 契哉瓢と有

灰器 真斎

花生 竹心再来

銘 鳴立澤

花 葉ほたに

水仙

水指

比老斎作

抱桶形

向 こち作身

岩茸

飯

茶入

黒唐津

煮物

かせ鱧

イ かせはも

袋 紹智きれの手

焼豆腐

阿蘭陀豆腐

新

茶碗

北野正遷宮節

イ 紹智作

吸物

干海老

蝦夷蕨

奉納 松の絵

北野正遷宮の砌

取肴

鮎子うるか

紹智作

奉納数之内

うたいも

イ うた芋

白くすりに松絵有

ひとり

ひとりて

臺

イ 「臺」ナシ

菓子

胡麻もち

相伴茶碗

こう麗堅手

銘雪曇

遠州候

茶

後昔

上林三入

茶杓

東陽坊 共筒

註25

右

竹輪

曲物

イ 藪内紹真方へさる御方

薄器

黒棗

御入被成候節□相伴参り

茶碗

廬山焼

註26

イ 是は初本願寺門主作之

茶請

イ □折敷一文字□

味そ

汁 かふら菜

註記

交趾呉器皿

註1 燕菴 藪内流の中核となる茶室。千家での不審庵・今日庵と同様に、藪内流を燕庵とも称する。古田織部好みの三畳大目である。高弟は正確な複製

を作成することが出来る。本歌が焼失の場合は、最も古い複製が藪内家に移築される。

註2 藪中斎 流祖藪内劍仲（一五三六―一六二七）の別号。

註3 大燈国師四行物（図1） 藪内家には大燈国師が一行物と尺牘四行物がある。一行物は会記に「生鉄崑崙雲外走」とあるが、現存するこの文面の書は古嶽宗巨筆とされている。

註4 引拙 名物茶器を多く所有した紹鴎以前の茶人。長らく正体不明であったが、所持道具等の検討から、天王寺屋宗伯と同一人物とされている。また、鳥居という名字は根拠がないことも明らかとなっている。なお宗伯は宗達の父ではなく、むしろ本来の天王寺屋の系譜の人物と思われる。同時期に連歌師松屋宗伯が居り、天王寺屋宗伯も連歌を嗜んだと思われるが、この二者は屋号が異なる。また引拙と三條西実隆との交流も検討を要する。

註5 古天鰐大鰐（図2） 環付が猿となっており、猿釜と呼ばれる。引拙が所持し、後に大和納言秀長に移った猿釜が著名。藪内家の猿釜は、伝来の俊成卿の懷紙を烏丸光廣に贈った返礼に、阿仏房長歌とともに賜ったものと、五代竹心が認めている。徳川美術館の姥口霰窯は環付が猿ではなく、「古田織部正所持芦屋霰姥口釜」と、秀吉からの伝来と修理まで踏まえて箱書きされている。

註6 キンマ宝珠（図3） キンマ（薔醬）は胡椒科胡椒属の常緑多年草。タイにおけるキンマの葉と檳榔樹を食べる習慣のため、その容器が漆塗りなどで発達した。これが輸入され、香箱・香合として使われた。参考のため、利休二百回忌に出た烏帽子香合（図4）も掲げる。

註7 劍仲號偈（図5） 春屋宗園筆

註8 姫瓜（図6） 胡銅象耳花生。初代劍仲に尼崎屋敷に、秀吉・利休が訪れ

たときに、利休が姫瓜を生けたという逸話により命名された。

註9 唐物圓壺（図7） 足利義政から藪宗把が拝領したと伝える。銘 天下一。唐物松の木盆が付属し、三好実休家伝と宗把が箱書きしている。

註10 伊賀（図8） 燕庵名物茶碗。

註11 利休作 桑茶杓 銘 孫の手（図9） 劍仲が筒を作成した。

註12 九条右府 九条尚忠（一七九八―一八七一）。文政七年―弘化四年（一八二四―一八四七）に右大臣。安政五年日米修好通商条約の勅許にからみ、閑白であったが孝明天皇により内覧職權を停止された。後に広如門主の室となる九条祥子は尚忠の養女として嫁いだ（補注1）。

註13 新御門主 本願寺廿世広如門主（一七九八―一八七一）。文政九年繼職（一八二六―一八七一門主）。後に客の九条尚忠の養女祥子が室となる。東儀薩摩守 東儀季誕（一八〇五―一八六二）。文政六年から薩摩守。

註14 阿佛房 鎌倉時代の僧（一一八九―一二七九）。承久の乱により佐渡に流された順徳上皇に仕えた。上皇薨去後落飾。のちに日蓮の弟子となる。

註15 俊成卿 藤原俊成（一一一四―一二〇四）。公家、歌人として著名。藪内家に和歌懷紙が伝わっていた。それを烏丸光廣に進上し、阿佛房長歌と大鰐猿釜を賜った。

註16 青貝香合 松の文様 著名な青貝香合は宝尽文である（図10）。それは千少庵が真翁に贈った。宝尽文を松葉に見間違える可能性は少ない。

註17 一重 なた作（図11） 劍仲作。裏面に「なた作 藪中斎（花押）」とある。

註18 柳藤四郎（図12） 和物茶入の伝統的分類法として、松平不昧が提唱した「窯分」がある。その第四段階の真中古は、二代藤四郎の隠居前の作とされる時期であり、その中に十を超える「手」がある。その一つが柳藤四郎手である。

註19 當御門主 この茶会は文政八年であり、本如上人の代である。客組に「新

御門主」とあるのが、文政九年に継職した広如である。本如上人は多くの手作り茶碗を作成したという。なお、広如継職が文政六年であるとするサイトなどがあるが、誤りであろう。

註20 古唐津(図13) 菊桐紋付。秀吉より剣仲拝領。

註21 奈良漬 糍漬 「漬」の文字は原文では手偏に見える。

註22 萩原新二位 蜷川恒存 横田。これらの客は不詳。公家半家の萩原の場合、二位にはならない。なお、この一連の茶会記と同時に、「蜷川恒弥次 鈴鹿石見守」の書状があり、関連があると思われる。

註23 相阿弥横物「安心」(図14) 相阿弥の標準的花押が右下にある。相阿弥に関連する掛物としては、『君台観左右帳記』の茶器図の断簡と思われるものが、表千家の伝授席に使われた例がある。

註24 香合織部(図15) 織部が袂に入れて剣仲に贈ったもの。底四隅に足がある。

註25 茶杓 東陽坊作(図16) 真如堂東陽坊(一五一五〜九八)から剣仲に贈られた。

註26 廬山焼 露山焼。本如の頃から、本願寺の御庭焼となった。楽慶入や仁阿弥道八などが招聘された。

補註

補註1 本願寺廿世広如光沢(一七九八〜一八七二)。十九世本如の養子。室は鷹司政熙娘、九条尚忠養子の光耀院祥子(一八一七〜四六)。祥子の没後為子との間に一八五〇、五二年、長男光尊、次男沢依が生まれる。第二著者耕三寺華蓮は、この沢依の末裔である(末尾系図参照)。

補註2 初座掛物は大燈国師であったが、後者は「大聖国師」と誤写したようである。「会膳」の部、「汁次 黒塗手付／豆子」の次の文字が、前者は「向」後者は「后」と翻刻されている。また、天目の項の最後が前者は「茶立前 盆立」後者は「茶之前 盆立」とある。

補註3 転写につき、両者翻刻は基本同一である。但し、「せ、らぎ」の誤字と見なされる茶人の項「右瀬戸」は「古瀬戸」に変更している。ところが、その項目の「東御門主寂如上人筆」の「東」は明らかにおかしいのだが、元字の推定が出来ないためか変更されていない。また、「香盆」はすべて「香合」に書き換えられている。

おわりに

本稿の翻刻と図版は耕三寺が初稿を用意し、矢野が最終的に本文を加えて纏めた。また資料収集には耕三寺孝三が協力した。

図版について使用・転載許可をいただいた、財団法人藪内燕庵 並びに藪内流竹風会に感謝申し上げる。



図7 天下一丸壺

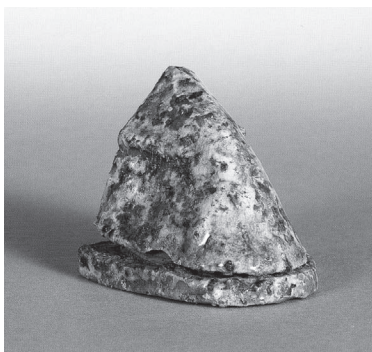


図4 烏帽子香合



図8 茶碗 伊賀



図9 桑茶杓 孫の手



図10 青買香合 宝尽文

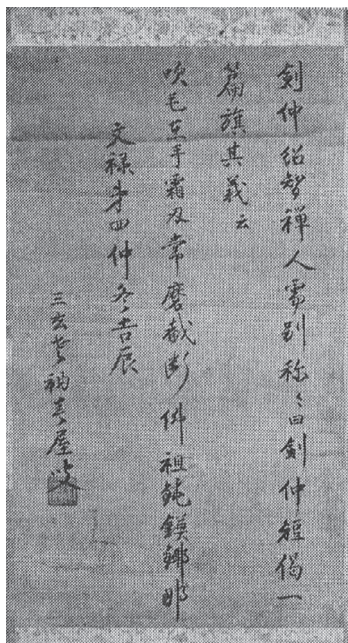


図5 剣仲号偈

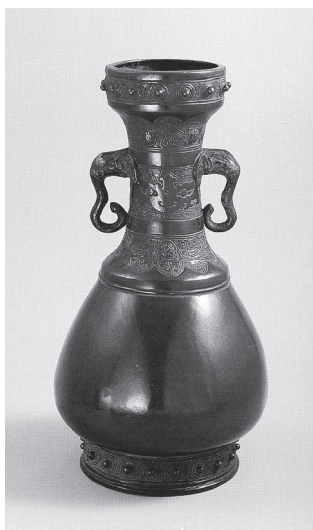


図6 姫瓜

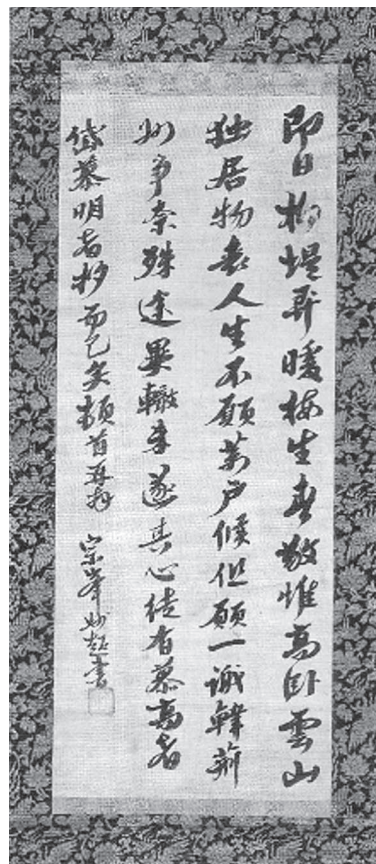


図1 大燈国師 四行物



図2 古天命大霰



図3 キンマ宝珠

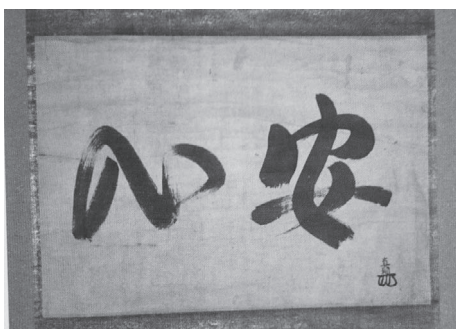


図 15 相阿弥「安心」



図 11 重花生 なた作



図 16 東陽坊作

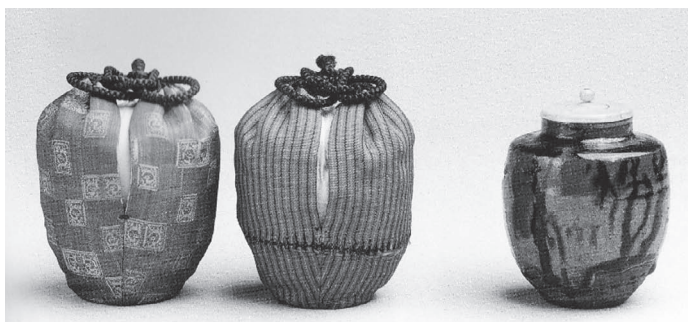


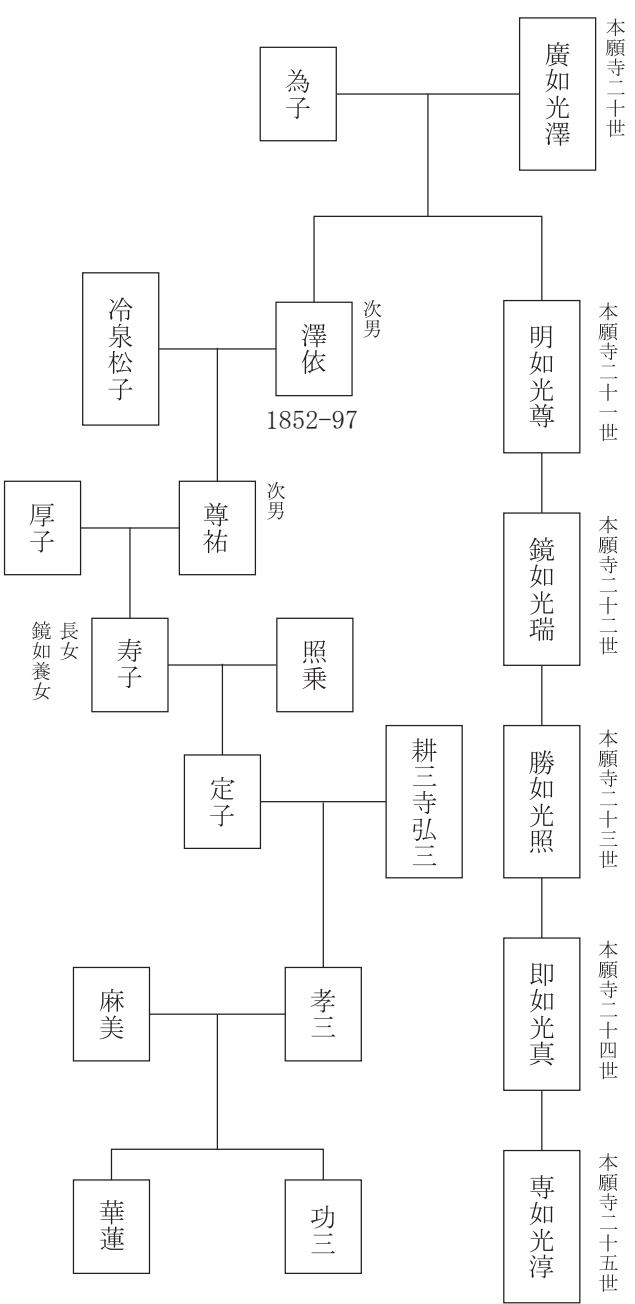
図 12 柳藤四郎



図 13 古唐津



図 14 織部香合



参考文献

- 〔茶せ〕「茶道せゝらぎ 第六卷第四号」せせらぎ舎（樂家内）一九四〇
- 〔源流 資〕藪内紹智「藪内家」『茶道の源流 第六卷 資料編』一九八三
- 〔源流 道〕「藪内家」『茶道の研究 第三卷 道具編』一九八三
- 〔利事〕『利休大事典』淡交社 一九八九
- 〔風47〕井上秀二「藪内家の茶会記 ―利休忌追悼茶事録―」『竹風 四七号』二〇〇一
- 〔風48〕千葉乗隆「本願寺の芸能（9）―本願寺における茶の湯（四）―」『竹風 四十八号』二〇〇一
- 〔風63〕カラー口絵『竹風 六十三号』二〇〇八

- 〔風75〕カラー口絵『竹風 七十五号』二〇一四
- 〔藪茶〕藪内紹智監修『藪内家の茶道』古儀茶道 藪内流竹風会 二〇〇八
- 〔宮武〕宮武慶之「宗峰妙超墨蹟の研究―茶の湯文化における受容史―」同志社大学文化情報学研究科博士後期課程 博士論文 平成二十六年
- 〔悠々〕NHK趣味悠々 二〇〇〇年十二月テキスト 二十八頁

図版出典

- 図2、4、6、7、9、11、13、16 〔藪茶〕
- 図15 〔風63〕 図1 〔風75〕
- 図5 〔源流 資〕 p.110 図8 〔源流 道〕 p.137 図12 〔悠々〕